

## 糸島空き家プロジェクト

# 九大生が九大生へ 新しいライフスタイルを提供

**糸** 島市と連携してさまざまなプロジェクトに取り組んでいるのは教職員ばかりではない。九大生による研究も熱い。

九大生が立ち上げているプロジェクトチームの一つ「糸島空き家プロジェクト」では、糸島市内に点在する空き家を自分たちで改修し、同じ九大生に格安で住まいを提供

### 九大生による 新しい提案



左官の指導の下、しつこい塗りを体験



舞台となった空き家



市林業研究クラブ指導の下、間伐を行う



ファームパーク伊都国内トンカチ館で製材

するという、面白い計画を進めている。この計画のメリットは①空き家対策②九大生への住まい提供③学生と地域の交流―の大きく3つであると代表の中川さんは語る。

**リフォーム物件第1号**

**舞** 台となったのは、糸島市篠原東にある築30年の一軒家。以前は薬局兼住宅として使われていたため、15畳もの広い土間がこの家の特徴だ。面白いのは家だけ

### 糸島空き家 プロジェクト代表

**中川 聡一郎さん**  
(九州大学大学院  
人間環境学府 修士2年)

僕がこのプロジェクトを提案した大きな理由。それは、入居者に糸島のライフスタイルを味わって欲



しかったからです。駅周辺のマンションを借りて住んでいる友人を見て、ふと「これでは都会と何も変わらない」と思い、地元の人たちと触れ合える、温かみのある生活ができないだろうかと考えました。

計画を進める上では、僕たち自身が温かい支援を受けるといった予想外の感動もありました。これで、ようやくスタートラインに立てたという想いです。今後も入居者と共にさまざまなイベントを企画し、地域との交流を図っていくつもりです。

ではない。九大生による改修作業は木を切るところから始まり、設計、製材、改修まですべて自分たちで行っている点に注目したい。さすがに大学生だけでは技術的に難しい面もあり、設計・工事の指導や資材の提供など、九大OBやシルバー人材センターの大王、地元業者の「(株)へいせい」をはじめとする多くの人々に協力してもらったそう。このことは九大生のプロジェクトを応援し、何より糸島を良くしたいという強い想いの表れではないだろうか。

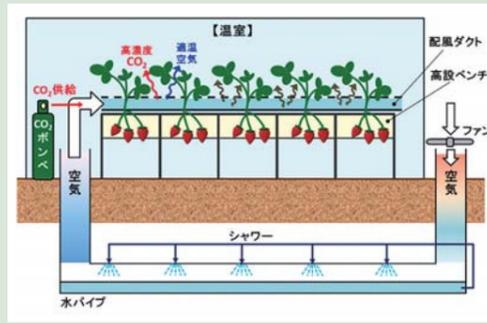
### ここからがスタート

**中** 川さんはこの家が完成しても終わりではないと語る。この言葉には2つの大きな意味が隠されている。1つは、この家の入居者と地域の人たちが交流できるイベントを今後は考えていきたいということ。もう1つは、中川さんの後輩たちに、空き家プロジェクトを受け継いでもらうということ。これからも九大生たちの熱いプロジェクトに期待したい。

## 糸島市九州大学連携研究助成金研究※

# イチゴ生産に役立つ研究 地中温度の利用で冷暖房費の節約をめざす

### 別図



**糸** 島の農業は今、大きな問題を抱えている。新規就農者不足による、生産農家の減少と高齢化だ。農業を始めようと思っても、初期投資に費用がかかる、また機械の維持費、燃料費などのさまざまな経費がかかる。新しい担い手が見つからない理由はこのあたりにある。

**糸島のイチゴ生産**

糸島でのイチゴ生産は、県全体の約8%を占めている。JA糸島の販売取扱額はイチゴが12億円(平成



イチゴの側に取り付けられた配風ダクト

**生** 産農家の頭を悩ませている要因の一つが近年の燃料費の高騰だ。そこで、九州大学の北野教授をはじめとする、岡安准教授、平野学術研究員、日高研究員(九州沖縄農業研究センター)久

### 地中温度を利用した 省エネ温度管理

21年度)と最も多いが、最近10年間で約30%も減少している。近年の温暖化による春・秋期の高温と冬期の低温、日照不足による品質悪化が主な原因だ。そのため、安定した生産と収益アップのために、適切な温度管理を可能にする低コスト技術が望まれている。

留米拠点)たちは、変化の少ない地中温度を資源として利用し、農家が簡単に自作導入できるイチゴの低コスト温度管理システム(別図参照)に関する研究を進めている。地下1〜2mの地中温度は、その土地の年平均気温に近く、日変化はない。季節変化も少なく、年中植物の適温付近に保たれている。

これらの特性を生かし、左記の(研究のポイント)を視点に研究を進めている。これにより暖候期も寒候期も安定して品質の良いイチゴを収穫することができ、JA糸島の目

### 〈研究のポイント〉

- ハウスと地中の熱交換を行う
- 土には熱を貯め、伝える能力が小さいので、ハウス全体ではなく、イチゴ周辺だけを適温に保つ
- 光合成に必要な二酸化炭素を一緒に供給し、低温と日照不足をカバーする



九州大学大学院  
農学研究院 農学博士  
**北野 雅治教授**

農業気象学、生物環境工学が専門で、主に作物の生体情報と気象環境への応答、気象資源の有効利用による持続可能な高収益農業技術などに関する研究を展開している。

### 研

究では、さまざまなデータを採取する必要があるので、高価な機材が使用されている。「これらの研究はお金がかかるので、今回の助成金があれば実験を行うことは難しかった」と北野教授は語る。

実際に実用化する段階では、すでに市場に出回っている汎用資材や簡易型のセンサーを加工して使用するため、導入費用は少なくて済む。

順調に事が進めば、自宅に居ながらハウス内イチゴ周辺の気温を把握し、ボタン一つで自在に温度調整ができるようになることは、そう遠い未来の話ではない。

※他の助成金研究一覧は7ページに掲載しています。